

# “飛ぶボール”の誕生。

ナガセケンコーが昭和9年に開発した初代の軟式用ボール『菊型健康ボール』。二重貼り加工が施され、割れにくい構造だ



昭和40年男が一番使っていたであろう4代目の軟式用ボール。ディンプル内に「JSBB」の文字が入り、ボールの内側にはタイヤと同じ黒ゴムが使用された



大人になってから草野球をやったことのある人は、この5代目にお世話になったはず。ディンプルが楕円形に変更され、20年間使用された



2006年にフルモデルチェンジされた現行の6代目。他と比べても表面のデザインがまったく違うのがわかる。飛ぶボールは流体力学を導入し、デザインされた



バットの革命児「ビヨンドマックス」が登場してから4年後の2006年、今度はエポックメイキングなボールが誕生した。その軟式用ボールは昭和40年男たちが使っていたボールとは、表面構造がまったく違っていいほど違っていた。野球用軟式ボールを昭和9年から製造・販売しているのがナガセケンコーだ。同社の製造する初代『菊型ボール』は第一回の団体で採用された実績を持ち、今や野球用の軟式ボールと言えば同社が代名詞的な存在。だが、ピーク時（昭和22年頃）にはメーカー22社がしのぎを削る時代だった。そして、1951年に同社が製造した二代目のボールが全国軟式野球連盟の新意匠となり、マイナーチェンジはあったが、長きに渡って使用された軟式野球用のボールの基となった。

昭和40年男たちが小さい頃に使っていたのは、二代目のディンプルの周りに星型が入る三代目（60年〜68年）を経てきた。内側にクルマのタイヤと同じ黒ゴムを使用した四代目（69年〜84年）のボ

ール。硬度と耐久性は上がったが、まれに劣化して割れるという現象を見た人もいるのではないだろうか。サイズは学童が「C」、中学生が「A」、一般が「L」という呼び名だった。その後、成人になり草野球をやる頃にはサイズの呼称変更が行なわれ、ディンプルが楕円になった五代目が20年間使用されてきた。

そして、ついに2006年、二代目誕生から実に55年ぶりにフルモデルチェンジが行なわれた。東海大学の青木教授によって流体力学が導入され、小円で三角形を形成する微小なディンプルと縫目を改良したことにより、『飛ぶボール』（六代目）が誕生するのである。飛距離も10%ほど上がり、指にかかりやすくなった縫目により、変化球も投げやすくなったと言われている。なかなか点が入りづらく膠着（こうちやく）状態の多い軟式野球に革命を起こしたと言われるこのボールの登場は、正にエポックメイキングな出来事だった。

左からナガセケンコーに併設されている軟式野球資料室の館長・高柳良治、同社商品本部・技術部部長の桜庭常明、同社商品本部・工場技術室の鈴木一慈英。3名から貴重な開発秘話を聞いた



軟式野球資料室  
 ◎東京都墨田区墨田2-34-9  
 ☎03-3614-3501 ☎朝10:00～昼4:00  
 ㊟日・祝/第2・4土曜/年末年始